

マイケル・フリードの美術史と写真論における「タブロー」の概念について

折居 耕拓 (大阪大学)

本発表では、アメリカの美術批評家にして美術史家であるマイケル・フリード (Michael Fried, 1939-) の仕事のうち、フランス近代絵画史研究と現代写真論を対象として、そこで論じられる「タブロー」(tableau) の概念に着目することから、彼の近現代芸術史観を明らかにする。

1960年代の美術批評において、フリードは、モダニズムの画家の課題は、現在において作品を絵画として確立するような条件を発見することであると主張している。のちに彼は、18,19世紀フランスの絵画と批評を対象とした歴史的研究へと転向するものの、2000年代以降、現代芸術写真の分析を通して初期批評の着想を再構成している。

写真論を含めた彼の美術批評に関するこれまでの研究では、初期批評の根幹をなす「メディウムの固有性」の概念を中心に考察が進められてきた。しかしそれらの研究のうちでは、彼の批評的著作と歴史的著作の双方において練り上げられてきた、絵画史における作品と観者の関係に関する議論とその展開について十分に論じられていない。

そこで本発表では、「観ること」(beholding) を批評的かつ歴史的に論じる際にフリードが一貫して重要視してきた、タブローの概念に着目する。タブローとは一般的に、特定の場所と空間から自由であり持ち運び可能である、西洋絵画の自律的な形式を意味する。フリードが独自に解釈してきたこの概念を検討することによって、彼が近現代芸術史のいかなる瞬間に、絵画芸術のアイデンティティの確立とその変容を見いだしているのかについて明らかにする。

第1に、美術史研究において、絵画における近代性の成立が、観者の不在というイリュージョンの確立とその試みの危機として提示されていること、そしてこの危機がとりわけ、1860年代のエドゥアール・マネの作品における、「肖像-タブロー」という表現形式のうちに見いだされていることについて論じる。

第2に、現代写真論において、美術批評家ジャン=フランソワ・シュヴリエが論じた「タブロー・フォルム」の分析を通して、壁にかけるために制作された大型の芸術写真に焦点が当てられていること、そしてそれらの作品が、美術史研究にて提示された観者に対する絵画の対面性という主題に基づき特徴づけられていることについて論じる。

結論として、フリードが、タブローの概念を主軸として、観られるために作品が制作されることの認知という観点から、自律性を有するひとつの絵画の実現を論じていること、そして、写真におけるタブローの概念の刷新のうちに、初期批評において唱えられ

た絵画芸術の生き残りの一局面を見いだしていることを主張する。以上の考察によって、フリードの近現代芸術史観に一貫するひとつの視点が明示されるとともに、モダニズムとそれ以後という区分を超えた地点において、ある作品が絵画芸術として理解される仕方を捉え直すことが可能になる。